V　横穴墓の研究

1　東アジアの横穴式墓室

1）竪穴式墓室から横穴式墓室へ

古代東アジアの墓室は、大きくみると、遺体を竪穴に埋葬する方式から、入口を横に設けた横穴に埋葬する方式に変化した。この竪穴式から横穴式への変化は、一人を一つの穴に埋葬する単葬から、原則として夫婦を同じ穴に埋葬する合葬への変化であった。

変化の時期は中国が前漢代（前202～後８）頃と古く、この影響がやがて韓半島へ、そしてさらに日本へ波及したとみて間違いない。

その後横穴式墓室は、中国では明朝（1368～1661）をへて、清朝（1661～1911）にも存続した。韓半島では、高麗朝（918～1392）まで残るが、次の李朝（1392～1910）では早くに竪穴式の土葬に戻ったようである。

ただ、韓半島でも百済では、６世紀後半頃から、横穴式石室は幅が狭くなり、単葬になったと推測されている。日本にもこの影響が及び、７世紀後半に入ると、横穴式石室は小型化し、幅も狭くなる。そして８世紀には、仏教の影響によって火葬が、天皇以下、官人層に一時的に流行するが、その後は竪穴式の土葬が再び主流となった。

夫婦合葬には、あの世でもともに再生したいという、熱い願いが込められていたと理解される。だが、死期は異なるのが通例であり、後の埋葬時には、先人の遺骸を目にしなければならなかった。この情景を反映したのが、いざなみの尊を慕って黄泉国にいった夫のいざなぎの尊が、膿がわき、虫がたかる妻の姿をみて逃げ帰ったという『古事記』や『日本書紀』の神代巻の記述である。両書が編纂された８世紀の初め頃には、すでに横穴式墓室に対して強い拒否反応が生じていたといえよう。

2）中国における横穴式墓室のはじまり

中国で横穴式墓室が採用されたのは、確実には前漢代からである。木・塼・石で部屋や入口を築く木・塼・石室墓のほかに、地下に横穴を掘っただけの洞室墓（土洞墓）や崖墓（横穴墓）などがある。

木室墓は、殷代（前1600頃～前1024）から続く竪穴式木槨墓の伝統を継承したと考えている。確実には前漢後期の例がわかっている程度だが、前漢中期か後期の北京・大葆台１号墓は、内部を前・後室や回廊に仕切り、入口も設けている。単葬であり、竪穴式とみる意見があるが、形は横穴式である。

秦（前221～前206）の始皇帝陵は、文献の記述から、多室の横穴式であったと推測されている。仮にそうだとすると、木室墓であった可能性がある。初現になる。前漢前期の皇帝陵もこの系譜をひくのかもしれない。

塼室墓は、前漢中期にはあり、後漢代（25～220）から全国的に普及した。文様塼を用いた例が多い。多室墓や単室墓が、皇帝から下級官人にまで広く、しかも長期にわたって採用された。

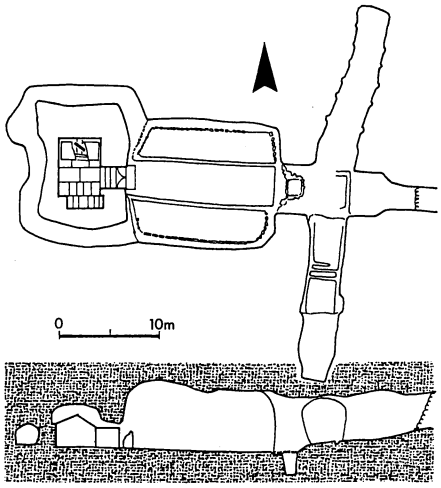
石室墓は、前漢中期の広州・南越王趙佗墓が最も古い例になる。多室墓だが、単葬である。後漢代には、画像を刻んだ多室墓が山東・江蘇省などで盛行したが、局地的であり、以後は次第に衰退した。

崖墓は、日本でいう横穴墓である。四川省や貴州省などでは、後漢から南朝に及ぶ例がある。中・小型であり、それほど有力な人の墓は見つかっていない。

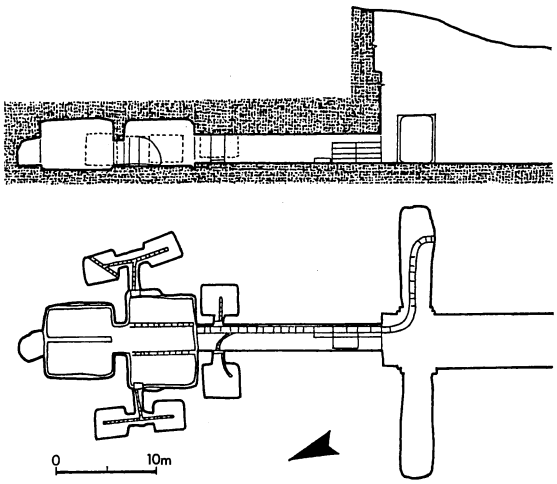
河北省・満城漢墓（挿図84－１）、江蘇省・亀山２号漢墓、山東省・九龍山漢墓（挿図84－２）は、大型の多室崖墓であり、内部に木や石で部屋をつくっていた。前二者は、中山国王や楚国王に封じられた漢室、劉勝（前113年葬）や劉注（前116年葬）とその夫人の墓である。ともに夫婦が近接して別々の崖墓（異穴併葬）を営んでいる点は、合葬への過渡的状況を示す。後一者は、景帝二年（前154）から建初三年（前４）までの、魯国王に封じられた漢室の墓と推定されている。

大型の崖墓は、上記の例以外には発見されていないようである。だが、唐の二代皇帝・太宗の昭陵、三代皇帝・高宗の乾陵などが自然の山を陵としていることからすると、山腹を穿って墓室とすることは、漢室に限ったことではなかった可能性がある。

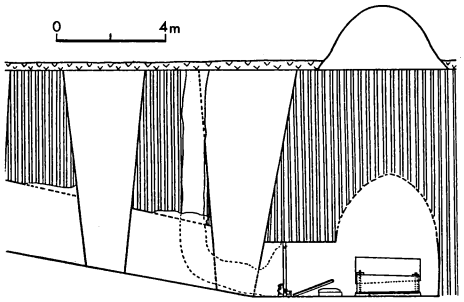
洞室墓（土洞墓）は、日本の地下式横穴墓と類似する。初現は彩陶の馬家窯文化期（前2500～前2000）にあるが、後に続かず、地域も中国西北部に限られている。中原地方では、戦国時代（前403～前221）の末頃にあり、前漢中期以降に普及する。



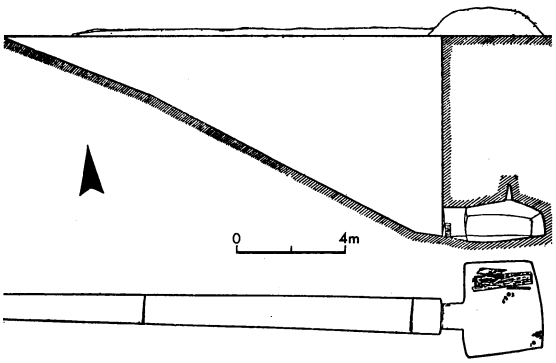
1. 満城１号漢墓（町田1977による）



2. 九龍山３号漢墓（町田1977による）



3. 隋李和墓（陝西省1966による）



4. 敦煌西涼墓（甘粛省1983による）

挿図79　中国の崖墓と洞室墓

墓道を垂直に掘った例は、概して小型であり、被葬者の身分はそれほど高くない。墓道を斜めに掘った例は、比較的大型である。後者は、北朝の古い時期、５世紀初頭頃から、隋・唐代の例が多い（挿図84－３・４）。被葬者には、大将軍など位の高い人もいる。

なお、後者の洞室墓には、墓室の奥に小さな一つの部屋を設け、ここに一人だけを葬った北周・若干雲墓（578年没）がある。横穴式だが、単葬化が、少なくとも一部でははじまっていたことを暗示する。

中国における横穴式墓室のはじまりは、戦国時代末～秦代に遡りそうである。ただし、前漢中期頃までは、むしろ竪穴式木槨墓が一般的であった。新式の墓室は、皇帝の一族や功臣など、限られた人々によってまず採用されたとする見方があたっているのであろう。

横穴式墓室であっても、前漢中期には単葬であったり、異穴併葬である例がわかっている。このことは、横穴式墓室の出現が、必ずしも合葬のはじまりではないことを示す。換言すれば、横穴式墓室は、死者のための宮殿や居宅を再現するという目的で生まれ、やがてここに夫婦を合葬するようになったと理解すべきかもしれない。

中国の横穴式墓室で注目すべき点は、崖墓を除くと、いずれも墓室が地下にあり、これに通じる墓道が地表から斜めか垂直に下っていることである。墓道は、遅くとも北魏末の６世紀前半頃からは、トンネル式に刳り抜くようになるが、それ以前は露天掘りであり、竪穴式木槨墓の伝統を継承したといえる。

崖墓は山腹に穿つ。崖墓としたことには、地形的制約ばかりでなく、思想的要因もあったと考えられるが、明解ではない。墳丘はないが、大型墓では山を墳丘と見立てており、崖墓を一律に低く評価することはできない。

３）韓国における横穴式墓室のはじまり

韓半島でも、竪穴式墓室が先行し、横穴式墓室の出現は遅れる。以下、国ごとに出現の様相をみてみよう。

韓半島における横穴式墓室の出現は、前漢にはじまる楽浪・帯方郡などの四郡設置（前108～後313）を契機とする。古い時期は竪穴式木槨墓だが、やがて前・後室をもつ夫婦合葬の横穴式木室墓（彩篋塚）が出現し、３世紀中頃からは横穴式塼室墓が主流となる。墓室は方形で、天井は穹窿状である。平壌・南井里119号墓は、板状の割石を小口積みした横穴式石室であり、塼室墓を模倣したと考えている。時期は、楽浪郡滅亡（313）前後か、４世紀後半頃とみる説が強い。韓国で盛行する石室墓の祖型の一つである。

高句麗では、遅くとも４世紀後半に、中国の遼東地方か楽浪の影響をうけて、夫婦合葬の横穴式石室が出現する。在来の積石塚に横穴式石室を採用したものであり、石室も墳丘中の、地表より高い位置に設けるという高句麗の竪穴式石槨（石室）の伝統を残している。竪穴式石槨に羨道をつけた「羨道付石槨積石塚」（いわゆる竪穴系横口式石室）も併存したようである。

高句麗の石室積石塚は、５世紀前半代に終焉し、以後は積石にかえて土を盛る石室墳が盛行する。４世紀代には多室墓があったが、５世紀に入ると前・後室の複室墓が主流となり、６世紀には単葬墓にかわった。

百済における横穴式墓室の出現は、確実には５世紀第４四半期、公州遷都（475）からであ

る。割石を小口積みにした、方形プランの穹窿天井式単葬墓である。日本への横穴式石室の波及を考えると、このタイプの横穴式石室が漢城（ソウル）時代の5世紀後半以前に登場していた可能性は高い。

百済でも、在来の竪穴式石槨（石室）に羨道をつけた、竪穴系横口式石室が営まれた。現在までのところ、5世紀末頃からとみているが、より古い例が発見される可能性があろう。被葬者は、横穴式石室に比べて在地性が強く、位も低いと考えられている。

伽耶では、竪穴系横口式石室が5世紀中頃から登場し、5世紀後半には主要な墓制の一つとなる。高句麗か百済からの影響を考えざるをえない。横穴式石室は、百済の影響を受けて、6世紀前半に登場する。全羅南・北道への横穴式石室の波及が5世紀第4四半期～6世紀第1四半期であり、これにやや遅れて出現したことになる。

新羅では、積石木槨墓の伝統が6世紀後半頃まで墨守される。横穴式石室は、6世紀後半に出現し、以後盛行する。6世紀前半には、竪穴系横口式石室が登場するが、例は多くなく、伽耶系の人々の墓制が持ち込まれたと考えている。

韓半島の横穴式墓室は、石室が主であった。横穴墓は、百済の扶余で1例が戦前に報告されている。遺体も遺物も残っておらず、墓か疑わしい点もある。6世紀末か7世紀に入る忠清北道の丹陽・下里の墓は、自然洞穴とみているが、横穴墓かもしれない。

4）日本への横穴式墓室の波及

日本における初現期の横穴式墓室は、佐賀・谷口古墳、福岡・老司古墳、同・鋤崎古墳などの竪穴系横口式石室や横穴式石室である。時期は、4世紀末から5世紀前半頃に比定されている。これらのうち前一者は、平面が長方形であり、竪穴式石室の伝統を残す。後二者は、平面が方形に近く、板状の割石を小口積みにして穹窿状に仕上げていることから、韓半島における古式の横穴式石室の影響を強く受けたと推測している。

後二者に近い例は、既述した百済・公州の穹窿天井式石室である。ただし、板状の割石が薄く、墓道が斜めに下降する点は、公州例にはみられない要素である。公州以前の漢城に祖型があり、これが南に波及した可能性が考えられよう。

横穴墓や地下式横穴墓の類例は、中国にあり、韓半島にもあった可能性がある。だが、これらの影響が日本に及んだことを示す確かな資料はつかめていない。

日本の横穴墓や地下式横穴墓は、5世紀中頃に出現し、しかもそれらは墓道が斜めないし垂直に下降する特徴をもつ。このことから、日本における初現期の竪穴系横口式石室や横穴式石室に起源するという見解が示されている。現在のところ、最も説得力がある。

参考文献

陝西省文物管理委員会　1966「陝西省三原県双盛村隋李和墓清理簡報」『文物』1996年1期
町田　章　1977　「華北地方における漢墓の構造」『東方学報』京都第49冊
〃　　1987　『古代東アジアの装飾墓』
甘粛省敦煌県博物館　1983「敦煌仏爺廟五凉時期墓葬発掘簡報」『文物』1983年10期
羅　二虎　1988　「四川崖墓的初歩研究」『考古学報』1988年第2期
東　潮・田中俊明　1987・1988　『韓国の古代遺跡』1・2
〃　　〃　　1995　『高句麗の歴史と遺跡』